

# テノ名詞句の意味と形式

茂木俊伸\*・森 篤嗣\*\*

キーワード: 名詞句, テ節, 連体修飾, 動名詞, 外の関係

## 要 旨

本研究は、「階段に座っての食事」「全力を尽くしての結果」のように、テ節を内部に含む名詞句(「テノ名詞句」と呼ぶ)について、(1) 主要部の被修飾名詞の特性、(2) 名詞句内のテ節の意味・用法、(3) テノ名詞句の統一的な意味、という三つの観点から分析を行ったものである。

本研究では、まず、先行研究の記述の整理を行い、問題となる点を明らかにした上で、形態的な基準に基づいて被修飾名詞を「述語性名詞」と「非述語性名詞」に分類し、それぞれの名詞とテ節との関係が異なることを指摘した(上記(1)(2))。先行研究で中心的に扱われてきた述語性名詞の場合、文(動詞句)に並行的な構造を持っており、テ節と名詞とは連用修飾に相当する意味の関係にある。この構造的な特性から、テノ名詞句において、一部の用法のテ節のみが生起可能であることが説明される。一方、非述語性名詞の場合、文に並行的な構造を持っておらず、連用修飾との関係は薄い。むしろ、この非述語性名詞には、「外の関係」の連体修飾に相当する意味関係を持った名詞の多くが該当するということが指摘できる。

以上のように、本研究では、従来は明確な整理がされてこなかったテノ名詞句を二つに区分した上で、さらに、二つのタイプのテノ名詞句でそれぞれ観察される制限から、テノ名詞句全体に共通する意味的特徴を抽出した(上記(3))。この特徴は、「時間的展開の内包」であり、最終的には、テ節が持つ一般的な特徴に還元できるものである。

## 1. はじめに

本稿は、次の(1)のように動詞テ形が連体助詞「の」を介して名詞を修飾する「～テ＋ノ＋名詞」型の連体修飾構造(以下、「テノ名詞句」と呼ぶ)<sup>1</sup>について記述を行い、その意味・構造上の特徴を明らかにすることを目的とする。

\* MOGI Toshinobu: 国立大学法人鳴門教育大学講師。

\*\* MORI Atsushi: 実践女子大学文学部国文学科助手。

<sup>1</sup> 以下、混乱を避けるため、この構造全体を「名詞句」、その中に含まれる被修飾要素を「名詞」として区別する。無論、被修飾名詞の位置には名詞句と呼ぶべきものも現れるが、ここでは便宜上、単純な名詞の例のみを扱うことにする。また、被修飾名詞の位置に複合名詞が現れるものも、語構成を考える必要があるため扱わない。

- (1) a. 階段に座っての食事(はご遠慮ください.)  
 b. 番組をご覧になってのご感想(をお待ちしております.)

日本語教育において、動詞テ形は初級から見られる重要な学習項目である。その用法は広範にわたり、特に補助動詞(「～てあげる」などの授受表現や「～ている」などのアスペクト表現)や複文を構成するテ節に関しては、これまでに多くの研究がなされている。一方、本稿で取り上げるテノ名詞句は、新聞やテレビといったメディア、あるいは掲示物などで日常的に目に触れる現象であるにもかかわらず、これまで文法研究、日本語教育いずれの分野においても、それほど注目されてこなかった<sup>2</sup>。

本稿では、このテノ名詞句について、テ節(テ形)の意味・用法、テ節の修飾を受ける被修飾名詞の特性、テノ名詞句の背景にある事態把握のあり方といった観点から考察を行う。同時に、本稿の分析が、この現象を日本語教育における文法事項として取り扱う際に有用な視点となりうるということを示す。

## 2. 論点の整理

テノ名詞句に関しては、これまで、姫野(1983)、井口(1992)、許(2001)が、用例の分類および特徴付けを中心とした分析を行っている。2.ではまず、これらの先行研究を整理し、テノ名詞句について論ずるにあたって問題となりうる点を指摘する。

これまでのテノ名詞句の特徴付けにおいては、名詞句内の「テノ」の部分および被修飾名詞部分をどのように言い換えられるか、という点が重視されてきた。そのポイントは、概ね次の2点に集約できると考えられる。

- (2) a. テノ名詞句内のテ節と文における連用修飾用法のテ節との関係  
 b. テノによる名詞の修飾と連体修飾節による名詞の修飾との共通点と相違点

以下、それぞれについて具体的に見ていく。

### 2-1. 文とテノ名詞句の並行性

まず、(2a)は、テノ名詞句とテ節を含む文とをどのような関係の下に捉えるか、という問題である。この問題は、次のように、テノ名詞句にテ節を含む文と並行的な意味解釈が得られるものがあることから生じる。

- (3) a. 階段に座っての食事

<sup>2</sup> 例えば、多くの文法事項を扱う庵ほか(2000, 2001)には、テ節の名詞句内の用法の記述はない。また、グループ・ジャマシイ(1998)では、「てのこと」「あつての」のような定型表現や、「に対しての」などの複合辞的表現の例が扱われているにとどまる。

## b. 階段に座って食事(を)する.

姫野(1983: 40)は、テノ名詞句が「「～して～する」という文において、後の動詞が名詞化」したものであるとし、許(2001)も同様に、この構造を複文の名詞化として捉えている。このように、連用修飾構造(テ節を含む文)と「の」を介する連体修飾構造(テノ名詞句)とが対応関係にあるという考え方をとった場合、当然のことながら、テノ名詞句内のテ節の用法と、文における連用修飾のテ節の用法との関係が問題になる。

実際、姫野(1983)は、連用修飾のテ節の分類からこの問題を検討しており、テ節の諸用法のうち、テノ名詞句の形を取りうるのは、(定型の表現を除けば)「推移・連続」「原因・理由」「方法・手段」の三つに限られ、「並立・対比」「逆接」のテ節ではテノ名詞句の形になりえないことを指摘している。

許(2001)はこの点をさらに検討し、南(1993)の分類を基に、テノ名詞句の形をとりうるのはA類相当のテ節(許(2001)の意味類型では「方法・手段」「付属状況」と、B類相当の一部(同じく「継起」「原因・理由」)であり、やはりB類相当の「並立」「逆接」「評価」およびC類のテ節はこの構造に現れえないということを実例によって検証している。

以上の点に対しては、大きく分けて二つの問題を提起することができる。

第一に、「すべてのテノ名詞句を等しく文との並行性から捉えられるか」という問題である。確かにテノ名詞句の用例を見ると、被修飾名詞の後に「する」を補うことでテ節を含む文に言い換えられるという例が多く、数の上ではそのようなタイプがテノ名詞句の典型であると言ってもよい。しかし、井口(1992)がテ節と被修飾名詞との意味関係の解釈に複数の方法を想定する必要があることを指摘しているように、テノ名詞句には、テ節を含む文との並行性が想定できないタイプのものが存在する。したがって、文との並行性という観点から捉えることのできるテノ名詞句は、複数あるタイプの一類型として位置付けるのが妥当である可能性がある。

第二に、姫野(1983)や許(2001)の指摘する現象を支える原理、すなわち「テ節の意味用法の一部のみがテノ名詞句に現れるのはなぜか」という問題である。現在のところ、この問題は現象の指摘と整理にとどまっており、それが「なぜ」起こるのかは未だ明らかになっていない。本稿では、これは上記のタイプのテノ名詞句の構造に依存する問題であり、テノ名詞句と動詞句との構造的な並行性から答えが与えられるということ論ずる<sup>3</sup>。

## 2-2. 連体修飾との関連

次に、(2b)の検討に移る。これは、テノ名詞句における「テノ」形の連体修飾と、一般的な名詞句における文による連体修飾、特に「～タ」形の連体修飾との関係である。これは、次のよう

<sup>3</sup> ただし、ここでは両者が統語的な派生関係にあるかどうかという問題には立ち入らない。

に、テノ名詞句に、連体修飾節を含む名詞句と同様の意味解釈が得られる場合があることによる。

- (4) a. ミサイルを使ったの攻撃  
 b. ミサイルを使った攻撃

姫野(1983: 41)は、この両者の言い換えの可否について、(慣用的な表現を除けば)「連体形の動詞と被修飾名詞の意味的関連が薄い場合、あるいは、連体節が底の名詞に対して内容を表す場合には意味を変えない言い換えが成立しない、としている。

この指摘の後半部分に関連して、姫野(1983)および井口(1992)は、テノ名詞句におけるテノ修飾句と被修飾名詞が、連体修飾における「外の関係」に相当する関係にあることを指摘している。先に2-1.で触れた、文との並行性が想定できるタイプのテノ名詞句であれば、テノ修飾句と被修飾名詞との関係は連用修飾に相当するものとなり、格関係が復元される「内の関係」が成立しないことは明らかである。しかし一方で、テノ名詞句には、このような連用修飾との接点が容易には想定しにくいタイプのものがある。次のテノ名詞句の被修飾名詞には述語性が感じられず、「する」を後接させることもできない。

- (5) a. それは、べつに深く考えての言葉でも、根拠のある忠告でもなかった。  
 (沢木耕太郎『一瞬の夏』)  
 b. 夫婦でお互いに理解し合っての結果と聞けば、口出ししない。

(毎日新聞 2005.4.7)

これらの例から、先に2-1.で述べたとおり、テノ名詞句の中には連用修飾との関係では捉えきれないもう一つのタイプがあることが分かる。しかし、どのような場合にこのタイプのテノ名詞句が形成されるのかについては、これまで整理されてこなかった。本稿では、「外の関係」の連体修飾の議論をもとに、この問題についても検討する<sup>4</sup>。

### 2-3. テノ名詞句の「意味」

以上、(2)に提示した二つの観点からテノ名詞句の問題点について概略を見てきたが、さらに検討すべき大きな問題がある。従来の研究では、テノ名詞句を主にこの二つの観点から分類することに重点が置かれてきた。その分類にも検討の余地があることは上で述べたとおりであるが、妥当な分類が得られた次の段階として、それらを抽象化してまとめあげることの可能性、すなわち、「テノ名詞句という形式が共通して持つ特徴はどのようなものであるのか」ということを考えることが求められる。

テノ名詞句に形式上類似する表現として、「太郎の本」のような「名詞 + ノ + 名詞」型名詞句

<sup>4</sup> 実際には(1b)や(5b)の例もタ形になりうることから、テ節を含む修飾句の果たす役割が内容補充かどうかということと、本稿で示すテノ名詞句の分類とは独立した現象として捉えられる。姫野(1983)が問題提起している連体修飾節との交替可能性の背景については、稿を改めて検討したい。

(cf. 西山 (2003)) や、「たくさんの本」のような「副詞 + ノ + 名詞」型名詞句 (cf. 佐野 (1997)) がある。これらは、それぞれ「所有者と所有物」「数量とモノ」のように、とりうる前項と後項の意味関係が決まっており、それに伴って後項(もしくは前項)に現れうる名詞に制限が生じる。本稿でも、テノ名詞句におけるテ節と被修飾名詞との間の意味関係や、被修飾名詞の特徴を詳しく検討することになるが、さらに、上に挙げた類似表現との形式上の差異、すなわち、テノ名詞句が「テノ」という形を含むがゆえに持つことになる特徴を一般化して表すことが必要になる。このような分析は、日本語学習者に対してテノ名詞句の表現と解釈に寄与する手がかりを提示するという教育的な意義もあろう。

この点に関しても、手がかりは先行研究によって与えられている。井口 (1992) は、テノ名詞句の意味解釈の一つの類型として、テ節部分に「てから」「た上で」「た結果」といった表現が補われる場合があることを指摘し、この現象と「完了」性との結び付きを示唆している。これは、テノ名詞句の意味の一般化を行う上で重要な点である。本稿では、連用修飾用法のテ節の議論を踏まえた上で、テノ名詞句の最も基本的な意味が、その構成要素であるテ節の基本的意味から導かれるということを主張する。

なお、「テノ + 名詞」の形式をとる名詞句のうち、先行研究において考察から除外されている慣用的表現(「知っての通り」や「日本きっての俊英」など)およびテ節部分が複合辞的表現を形成している場合(例えば、「要求に対しての返答」)については、本稿でも分析の対象としない。さらに、次のような表現についても、それぞれ特有の特徴があり、別途分析が必要になると考えられるため、考察の対象から外すこととする。

- (6) a. 「こそ」の挿入が可能な場合                   (例: お客さんあって(こそ)の商売)  
       b. 被修飾名詞が形式名詞の場合               (例: よく考えてのこと)

以下、本稿の具体的な分析に移る。

### 3. 被修飾名詞の形態的分類

初めに、テノ名詞句における被修飾要素である名詞の部分の特徴に着目し、次節以降の分析のために、名詞をその性質から大きく「述語性名詞」と「非述語性名詞」とに分類する。

ここで「述語性名詞」と呼ぶ名詞を主要部とするテノ名詞句は、先行研究において文との並行性が指摘されてきたものであり、基本的に「する」の後接を許すタイプである。このタイプのテノ名詞句では、先に 2-1. で提起したように、テ節と名詞との意味関係のあり方、およびテ節の用法の制限といった点が主な問題となる。

一方、「非述語性名詞」は、述語性名詞のような述語との関係が見られない名詞である。非述語性名詞は、上の述語性名詞のような連用修飾との並行性がないにもかかわらず、「の」を介して名

詞がテ節の修飾を受けていることになる。このタイプのテノ名詞句は、2-2. で触れたように、「外の関係」の連体修飾との関わりから捉えることができる。

ここまで挙げた例からそれぞれのタイプのものを挙げると、次のようになる。

- (7) a. ミサイルを使つての攻撃 (= (4a)) [述語性名詞]  
 b. 深く考えての言葉 (= (5a)) [非述語性名詞]

なお、テノ名詞句は直感的に、省略部分を含んだ(一部を「端折った」)表現であると感じられる(姫野(1983))。このため、(7)のいずれのタイプのテノ名詞句においても、「ミサイルを使つて行う攻撃」「深く考えて得られた言葉」のように、「の」が何らかの述語を代用しているとする統一的な分析も想定できる(例えば、内間(1996)はこの立場に立つ)。

しかし本稿では、「の」に恣意的な役割を持たせることはせず、これら二つのタイプのテノ名詞句におけるテ節と被修飾名詞との修飾関係のあり方が大きく異なると考え、少なくとも構造的な観点からの統一的分析は妥当でないと考える。したがって、本稿では手順として、まず構造的な観点から、述語性名詞と非述語性名詞に分けて個別に考察していく。一方、後述のように意味的な観点からは述語性名詞と非述語性名詞は連続していると考えられるため、次にその共通性について改めて分析する。

#### 4. 述語性名詞

本節ではまず、先行研究でも中心的に扱われてきた、述語性名詞を含むテノ名詞句について検討を行う。手順としては、まず述語性名詞の基本的特徴について概観し(4-1.)、次にテ節との関係について考える(4-2.)。

##### 4-1. 基本的特徴

述語性名詞を主要部とするテノ名詞句は、先にも述べたとおり、述語文との並行性を持つと考えられる。述語性名詞の最も典型的なものは、動きを含んだ出来事的な意味内容を持ち、「する」を後接することのできる名詞群である。

本稿では、述語性名詞として、「する」の後接を許すもの、もしくは動詞から派生されたものを認めることにする。これらの形態的基準を満たすのは、前者として、サ変動詞語幹となる(8a)の漢語名詞や(8b)の外来語名詞、また、後者として、(8c)のような名詞が挙げられる。

- (8) a. 家族を置いての転勤、図書館に行つての勉強、10億円かけての開発  
 b. 装置を取り付けてのテスト、親に黙つてのデート、寝不足がたたつてのミス  
 c. 批判を受けての取り消し、村をあげてのもてなし、真相を知つての驚き

南(1993: 125-6)が指摘するように、これらの名詞は対応する述語句と同様の構造を持ち、そ

それぞれの項が「の」でマークされる<sup>5</sup>。「の」の前には、「数学の勉強(ヲ格)」「北海道への転勤(ニ格)」のような動詞がとる項だけでなく、「図書館での勉強」「花子との旅行」のように付加的な要素である場所句(デ格)や相手句(ト格)なども現れる。テ節の生起も、これらと同様の規則性を持った現象であると考えられる (cf. 姫野 (1983))。

述語性名詞を主要部とするテノ名詞句のテ節は、述語性名詞の表す内容を意味的に修飾している。このとき、「の」を介した連体修飾のあり方は、先行研究も論じているとおり、連用修飾の場合と同様に捉えてよいものと思われる。このことを踏まえ、次に、テノ名詞句におけるテ節の用法(意味解釈)、テ節位置に現れうる従属節の種類について詳しく検討することにする。

#### 4-2. 述語性名詞とテ節

姫野 (1983) および許 (2001) が指摘するように、テノ名詞句に現れるテ節は、いわゆる「付帯状況」「継起」「原因・理由」といった複数の解釈を持つ。「付帯状況」とは、被修飾名詞の事態に並行してテ節の事態が進行しているという解釈、「継起」「原因・理由」は、テ節の事態に続いて被修飾名詞の事態が起こるという解釈(仁田 (1995) は前者を「時間的継起」、後者を「起因的継起」とする)である<sup>6</sup>。それぞれの例を次に示す。

- (9) a. 重要書類を持っての移動 (付帯状況)  
 b. 重要書類を確認しての契約 (継起)  
 c. 重要書類を忘れての遅刻 (原因・理由)

テ節の意味解釈には連続性があり(仁田 (1995))、その違いを明確に規定することは難しい面もあるが、その点を保留したとしても、どのような条件によりテノ名詞句においてこれらの解釈が可能になっており、逆に「並立」などの解釈が成立しないのかを考える必要がある。

この問題を考えるために、テ節以外の従属節にも目を向けてみる。テノ名詞句内(「の」の前の位置)に現れる従属節を見ると、許 (2001) による「て」「ながら」や「つつ」「まま」にほぼ限られると言ってよい。許 (2001) が指摘しているように、これらは南 (1993) の A 類および B 類従属句に該当する。

- (10) 対立点を念頭に置き {ながら / つつ} の議論 (付帯状況)

<sup>5</sup> 「する」が後接する名詞(影山 (1993) では動名詞 (verbal noun) と呼ばれる)では、個人差も含め、後接の判断に差が生じる場合がある。例えば、本稿で非述語性名詞としている「原因」「結果」に「する」が後接することもある(荻野 (1996))が、一般的な動名詞のような項構造は想定しにくく、生産的な用法とは考えにくい。逆に、「犯行、論戦、怠慢、不満、医療」のように、述語的な意味を含みながら「する」の後接を許さない名詞も存在する。これらは、意味的には動名詞に準ずると考えられるが、本稿の形態的な基準では非述語性名詞に分類されることになる。このような分類の境界上にある例の詳しい分析は課題として残っている。

<sup>6</sup> 姫野 (1983) と許 (2001) の分析に反し、「半年のブランクがあつての優勝」のように、逆接的な解釈が可能でテノ名詞句も存在するが、この解釈の許容度には個人差がある可能性があるため、ここでは指摘にとどめる。

一方、(9c) のように、原因・理由を表すテ節は名詞句内に現れるが、同様の意味を表すノテ節・カラ節は次の(11)のように許容されない。つまり、テノ名詞句内の従属節の出現は、節の意味用法ではなく、形式的な要因によって説明すべき現象であるということになる。

- (11) \*生活に困った {ので / から} の自殺 (原因・理由)

以上の現象に与えるべき説明は、これらの従属節の統語論的な特徴に求めることができる。ここで見た述語性名詞が、動詞句相当の構造を持っている(影山(1993))とすると、基本的に動詞句内に現れうる要素であれば、このタイプの名詞句内に現れうる、ということが予測される。従属節の場合、動詞句内に付加される節ならば述語性名詞を主要部とするテノ名詞句内に現れうる、ということである。このことは、Koizumi(1993)のとりたて詞「さえ」を使ったテストによって確かめることができる。このテストは、従属節を含む文の主節動詞に「さえ」を後接させ、従属節がその焦点に含まれるかどうかで当該の節が動詞句内に付加されるものであるか否かを判別するものである。

Koizumi(1993)では(11)のような理由節がこのテストに通らないことが指摘されているが、同様にテ節についても考える。次の例の角括弧部分が「さえ」の焦点であり、「テ節+主節動詞で表される事態は想定しにくい(意外である)」という解釈が可能であれば、テ節は「さえ」の焦点に含まれると言える。基本的に「並立」のテ節を含んで焦点化することはできず、(12d)の「さえ」の焦点はテ節以降の部分と解釈するのが自然である<sup>7</sup>。

- (12) a. 彼らは、あまりの嬉しさに[手をつないで踊りだし]さえした。(付帯状況)  
 b. その男は、[家族を置いて逃亡し]さえした。(継起)  
 c. 父親は、[心配になって娘を尾行し]さえした。(原因・理由)  
 d. \*その村は、[大きな池があつて山が周囲を囲んでい]さえした。(並立)

このテストの結果は、先行研究が挙げているテノ名詞句内に生起可能なテ節の用法(2-1.)と一致する。実際、(12a-c)のテ節は、「手をつないでの踊り」「家族を置いての逃亡」「娘が心配になっての尾行」のようにテノ名詞句内に生起することができる。したがって、述語性名詞を主要部とするテノ名詞句におけるテ節の生起は、動詞句と並行的な構造を持つという述語性名詞の統語的特徴から説明されることになる。

## 5. 非述語性名詞

前節までの述語性名詞の分析に続いて、本節では非述語性名詞を主要部とするテノ名詞句の分

<sup>7</sup> テ節の解釈自体が連続的なこともあり、「さえ」焦点化テストの判断にはゆれが生じる可能性がある(テ節に対するテストに関しては、佐藤(1996)も参照)。しかし、少なくとも「並立」とそれ以外の解釈の間には大きな許容度の差があると考えられる。



析を行う。手順は前節と同様に、非述語性名詞の基本的特徴を概観した上で(5-1.)、テ節との関係において生じる問題を検討する(5-2.)。

### 5-1. 基本的特徴

3. で述べたとおり、非述語性名詞は「する」が後接せず、動詞の派生形でもないという形態的特徴を持つものである。述語性名詞は述語文との並行性によってテノ名詞句を成立させるわけであるが、非述語性名詞は並行的な連用修飾が想定しがたい。しかし、主要部が非述語性名詞であってもテノ名詞句が成立することもある。

そして、テノ名詞句における非述語性名詞の分類の手がかりとなるのが、姫野(1983)および井口(1992)がタ形との言い換え可能性の議論で指摘している連体修飾の「外の関係」である。すなわち、テノ名詞句の被修飾名詞には、寺村(1977=1993)の「外の関係」の4分類(「発話思考」「コト」「感覚」「相対性」)に含まれるものが多く該当する。

- (13) a. 「発話思考」：深く考えての言葉，番組を見ての感想  
 b. 「コト」：知人を逆恨みしての事件，過去の失敗を踏まえての方針  
 c. 「感覚」：家族を失っての悲しみ，大学受験を控えての不安  
 d. 「相対性」：夫婦でお互いに理解し合っての結果，友人を病院に見舞つての帰り

これらの例では、被修飾名詞とテ節の関係を見ると、「考え」た結果の「言葉」、「家族を失った」ことによる「悲しみ」のように、先に述語性名詞の分析で見た「継起」「原因・理由」に近い解釈ができる場合がある。しかし、そのような解釈が可能であっても、連用修飾と並行的な形でテ節が被修飾名詞の事態を修飾していた述語性名詞の場合とは、明らかに構造的に同一視することができない。そこで、被修飾名詞そのものの特徴をより詳しく見ていく必要がある。

寺村(1975=1993:198)によれば、連体修飾の「外の関係」とは「内容補充的修飾」であり、連体修飾節が被修飾名詞の内容を補う関係である<sup>8</sup>。ただし、「内容補充的修飾」といっても、その内実は上の(13)の分類ごと、さらには被修飾名詞ごとに異なる。また、詳しくは後述するが、テノ名詞句の成立可能性に深く関わるのは「動態性」である<sup>9</sup>。ここで動態性と呼ぶ概念は、被修飾名詞の意味に関するものであり、当該の名詞句が、動きを伴った出来事的な意味を表す度合いを指す。したがって、以下の分析ではそれぞれの分類における動態性の程度に注目する。

<sup>8</sup> ただし、「外の関係」に属する被修飾名詞が必ずしも「外の関係」にならず、「内の関係」になることもあることに留意されたい。寺村(1975=1993)が指摘するとおり、名詞は「実質性」「コト性」「相対性」というようなそれぞれの性質を併せ持つこともあるからである。「外の関係」においても、寺村(1977=1993)は、例えば「結果」は「コト」名詞としても「相対性」名詞としても使われうるとしている。

<sup>9</sup> 4. で扱った述語性名詞は、「動名詞」と呼ばれることもあるように)形態的に動詞が担う意味を持つことが保証されているため、基本的に動態性が存在すると考えることができる。一方、非述語性名詞においては、出来事的な意味を持つかどうかが個々の名詞によって異なるため、非述語性名詞の動態性の有無は個別に考えていく必要がある。

まず、「発話思考」に属する被修飾名詞について考察する。寺村（1977 = 1993）では、発言に関する名詞として、「言葉、文句、手紙、返事、電報、申し出、誘イ、命令、依頼、噂、小言、不平」を、思考に関する名詞として、「思イ、考工、想像、期待、意見、思想、気モチ、決心、仮定、信念」を挙げている。このうち、「返事、命令、依頼、噂、想像、期待、意見、決心、仮定」は「する」が後接するため、また「申し出、誘イ、思イ、考工」は動詞派生名詞であるため、本稿の基準では述語性名詞に属する。そもそも「発話思考」に属する被修飾名詞は、「発言」ないしは「思考」に関する名詞であるため、述語性名詞の割合が高いのは当然のことである。「言葉、文句、手紙、電報、小言、不平、思想、気モチ、信念」は、非述語性名詞に分類はされるものの、いずれも「による」によって動作主がマークできる<sup>10</sup>ことから、比較的動態性が高いことが確認できる。

次に「コト」に属する被修飾名詞は、数が多いだけでなく意味的な分布も幅広い。寺村（1977 = 1993）では、「コト」に属する名詞として、「事実、事件、運命、習慣、歴史、可能性、方法、行事」などを挙げている。「記憶、心配、作業、準備、修練、矛盾、約束」など、「コト」に属する被修飾名詞に「する」が後接して述語性名詞となることもあるが、「発話思考」に属する被修飾名詞よりは少ない。同じく「騒ぎ、怖れ、憂い」など動詞派生名詞も一部に見られるが、その割合は高くない。また、「による」によって動作主がマークできるものもあれば、できないものもあり、動態性の高さはまちまちである。5-2. で取り上げるが、上記の「コト」に属する被修飾名詞の中でも、「事実」のように動態性の低いものは、テノ名詞句になりがたい。

次に「感覚」に属する被修飾名詞であるが、寺村（1977 = 1993）は感覚の名詞として、「姿、形、色、音、匂イ、味、感触、絵、写真、光景」などを挙げている。寺村（1977 = 1993）は「発話思考」と「コト」が知的・概念的な人間の認識だとすれば、「感覚」は感覚・知覚的な人間の認識を表すものであると述べている。「感覚」に属する被修飾名詞は、基本的に「する」が後接することはなく、述語性名詞にはならない。また「による」によって動作主をマークすることも難しい<sup>11</sup>。「感覚」に属する被修飾名詞は全体として動態性が低く、テノ名詞句の成立可能性も著しく低いと言えよう。

最後に「相対性」に属する被修飾名詞である。詳しくは後述するが、寺村（1975 = 1993: 202）が指摘するとおり、「相対性」に属する名詞は「発話思考」「コト」「感覚」に属する名詞とは補充のあり方が大きく異なり、いわば「逆補充」とでもいうような現象が起こる。したがって、「相対性」に属する被修飾名詞には、相対的な意味を持つ名詞のみが属することとなる。寺村（1977 = 1993）では、「前、うしろ、のち、翌日、帰り、最初、最後、当日、中、相手、理由、原因、結果、

<sup>10</sup> 名詞の動態性を考える際には、名詞の意味とともに、「による」によって動作主がマークできるか否かが一つの目安となる。

<sup>11</sup> 「絵」や「写真」は生産動詞の結果であるため「による」によって生産者を表すことができるが、名詞そのものの動態性を示すものではないと考えられる。

残り，形跡」などが挙げられている。「相対性」に属する名詞は，あくまで構文的に修飾部と被修飾部が逆補充になることが条件であるため，被修飾部である被修飾名詞だけを見て，その性質を判断するのは難しいが，4. に示したように形態的に見て述語性名詞の基準を満たすとは言い難いことから，非述語性名詞であると言える。ただし，この「相対性」に属する名詞は，他の非述語性名詞と性質が大きく異なると考えられるため，後で特に扱うことにする。

このように，「発話思考」及び「コト」では「する」が後接して述語性名詞になるものがあり，「による」によって動作主がマークできる動態性の高い名詞も含まれる。一方で「感覚」では「する」が後接せず，「による」によって動作主をマークできない動態性の低い名詞がほとんどである。なお，「相対性」については上記のとおり，テ節と被修飾名詞の関係が特殊であるため，別途検討する必要がある。それぞれの分類の中での分布は様々であるが，一定の傾向は以上のようにまとめられる。

## 5-2. 非述語性名詞とテ節

非述語性名詞の特徴は，述語性名詞に比べ，テノ名詞句の生産性が低いという点にある。具体的には，テ節と被修飾名詞の関係が同じでも，被修飾名詞の意味によって許容されない場合がある。5-1. では動態性に注目して被修飾名詞の考察を行ったが，この特徴がテノ名詞句の成立可能性に関わっていることを改めて取り上げたい。

基本的に「発話思考」の名詞では，大多数がテノ名詞句を成立させるが，「コト」「感覚」「相対性」の名詞では，動態性の低さによってテノ名詞句を成立させない名詞が存在する。特に「コト」名詞は動態性が非常に高いものもあれば低いものもあり，その分布は広い。例を挙げて検討してみよう。「コト」に属する名詞からテノ名詞句を作ろうとした場合，その中でも相当に成立可能性に揺れがあり，「事実」や「性質」といった名詞ではテノ名詞句が成立しにくいのに対し，「事件」や「騒ぎ」などの名詞では成立しやすい。

- (14) a. \*研究機関が新たに調査を行っての {事実 / 性質}  
 b. 政権交代を狙っての {事件 / 行事}

非述語性名詞では，意味解釈の上では，文脈に基づいて「の」の部分に述語を適宜補う必要があるが，(14a) のように，「(行って)判明した」のような述語を読み込んでも，テノ名詞句の形が成立しない場合が生じる。

この現象は，被修飾名詞の意味的特徴に起因していると考えられる。連用修飾用法のテ節は，基本的に，事態と事態の時間的關係(並行的あるいは継起的)を表すものである。したがって，同じ名詞であっても，テ節の表す事態との時間的關係の捉えやすい，動態性を持つ被修飾名詞ではテノ名詞句が成立しやすく，そうでない名詞では(タ形はとれても)テノ名詞句は成立しにくくなると考えられる。

被修飾名詞の動態性という基準によって(13)の分類を再検討してみると、「発話思考」に属する名詞は、寺村(1977=1993)にもあるように、「言う」「思う」類の動詞が名詞化したものと言うことができる。これらの名詞は、述語性名詞のテノ名詞句とは構造的には異なるが、「による」で動作主がマークされやすいことから、意味的には動詞派生名詞に近く、動態性が高いと考えられ、テノ名詞句との親和性は高い。5-1.の「発話思考」の名詞のリストで言えば、述語性名詞を除いた「言葉、文句、手紙、電報、小言、不平、思想、気モチ、信念」のテノ名詞句の成立可能性は高いと言える。

「コト」に属する名詞は、(14)の例でも説明したように、被修飾名詞の動態性によりテノ名詞句との親和性に高低の幅が出る。「コト」に動態性を読み込めるような名詞であればあるほど、テ節との時間的関係を捉えやすくなり、テノ名詞句との親和性が高くなると言うことができる。「による」によって動作主をマークできる名詞は動態性を内包していると言え、そこから時間的展開性を読み込むことができるため、テノ名詞句との親和性が高くなる。5-1.の「コト」の名詞のリストでは、「事件、習慣、行事」は動態性を持つため、比較的テノ名詞句の成立可能性が高く、逆に「事実、運命、歴史、可能性、方法」では低い(ただし、判断は話者によって若干の揺れがあると思われる)。

「感覚」に属する名詞では、動態性は低くなり、それとともにテノ名詞句との親和性も低くなる。5-1.でも述べたとおり、「感覚」に属する名詞は述語性名詞にもならなければ、「による」で動作主がマークされることもない。これらの理由から、「感覚」に属する名詞全体にわたって動態性も高いとは言えず、そのことがテノ名詞句との親和性を低くさせていると言えよう。5-1.の「感覚」の名詞のリストでは、動詞派生の「匂イ」を除けば、「感触」のみが「実際に触っての感触」のようにテノ名詞句の成立可能性を持つ。これは「感触」が形態素として「触れる」を含む形で成り立っており、動態性を持っているためであろう。その他の「姿、形、色、絵、写真」などは動態性が低く、いずれもテノ名詞句の成立可能性は低い。

このように、非述語性名詞には、「発話思考」>「コト」>「感覚」とテノ名詞句の成立可能性に段階性が存在すると言える。

一方、寺村(1975=1993)において「外の関係」は大きく「ふつうの内容補充」と「相対的補充」に分類できるとされているように、「発話思考」「コト」「感覚」の三つと「相対性」には隔たりのある。テ節と被修飾名詞の関係が異なるということから、「相対性」タイプの名詞には他の名詞とは異なる制限が見られることが予測される。それが次の例である。

- (15) a. 全力を尽くしての {結果 / \*理由}  
 b. 一日がかりで移動しての {翌日 / \*前日}<sup>12</sup>

<sup>12</sup> (15b) は、ここでの議論におけるより適切な例として、本誌査読者よりご指摘いただいた。

「相対性」タイプの(15)では、テ節の事態が被修飾名詞の表す事態よりも前に来る場合にはテノ名詞句が成立するが、その逆の関係は成り立たない。これらの例は、タ形にすれば何ら問題がない。したがって、この現象にも、テ節の意味が関与していると考えられる。改めて6.において、テ節の意味という視点から、テノ名詞句全体の特徴付けについて扱うことにする。

## 6. テノ名詞句の意味の一般化

前節までの議論では、テノ名詞句の被修飾名詞に注目し、述語性名詞と非述語性名詞という分類に基づいて検討したが、最後に、テ節の側からの検討を行う。

述語性名詞の場合、テ節は「付帯状況」「継起」「原因・理由」といった意味解釈が可能であった。テノ名詞句内に現れうるのは、文において動詞句内に付加されるテ節であり、そのような統語的特徴を持つテ節は、概ね上の三つの用法に限定される。

一方、非述語性名詞の場合も、テ節の解釈としては述語性名詞と同様のものが得られ、さらに、前節の最後で見たように、テ節と被修飾名詞の時間的関係の制約が観察される。

これらの事実を一般化すると、次のようになる。

(16) テノ名詞句において、テ節の事態と被修飾名詞の事態とは、継起的もしくは並行的な関係にあり、この関係が逆行することはない。

この制約は、被修飾名詞がどのようなものであれ、テノ名詞句という形式に課されるものである。先にも触れたように、このような制約が存在する理由は、テ節に求める必要がある。

テ節についてはさまざまな分析があるが、渡邊(1994)は、テ節(テ形)そのものの持つ意味は、前件・後件の関係(テ節の諸用法)と区別されるものであり、次のように規定されると分析している<sup>13</sup>。

(17) テ形接続文においてテ形が担う意味機能とは、「前件の事象が実現しているという認識に基づいて、後件の事象を語ること」である。(同: 399)

このような見方をするならば、テノ名詞句における(16)の一般化はうまく捉えられる。被修飾名詞が述語性名詞の場合は、述語文との並行的な構造により、言うまでもなくテ節との時間的関係を読み込むことが可能である。一方、被修飾名詞が非述語性名詞であっても、テノ名詞句が成立するには、その動態性が重要となる。述語文と並行的な構造は持たなくとも、動態性を持つ名詞であれば、テ節と被修飾名詞を意味的に連続的な事態として把握することが可能であり、時間的関係を読み込みやすくなるのである。

すなわち、テノ名詞句はテ節を含んでいるがゆえに、被修飾名詞との間に先の(16)のような

<sup>13</sup> 付帯状況の場合は、動詞の表す事象の開始点を越えることが「実現」と解釈されている。

時間的關係の制限を生じる，ということになる．したがって，(16) は，次のことから導かれる．

(18) テノ名詞句には，テ節の持つ時間的な展開が内包されている．

最後に本稿の主張を整理する．先に 3. から 5. までで論じたように，構造的な観点からは，被修飾名詞の特徴によって，テノ名詞句を異なった二つのタイプに分ける必要がある．しかし一方で，6. で示したように，意味的な観点からは，テノ名詞句全体に共通する特徴を適用することができる．教育的観点からは，このような一般化が可能であることは，テノ名詞句という形式に共通する意味特徴を教えることが可能になるということになる．この点を学習項目に加えることによって，表現の解釈に効果があると思われる．

## 7. おわりに

本稿では，テノ名詞句について，先行研究における分類を再検討(2.)し，テ節と主要部の構造的な異なりから被修飾名詞の分類(3.)を行い，関連現象の分析(4., 5.)を行った．さらに，テ節の意味解釈からテノ名詞句の構造に共通する意味的特徴を抽出した(6.)．

テノ名詞句を構成するテ節と「の」，連体修飾構造のそれぞれは，日本語教育における学習項目として重要視されているが，テノ名詞句そのものはほとんど注目されてこなかった．テノ名詞句を一つのまとまりとして捉え，そこに共通する意味的特徴を抽出することには教育的意義があると考えられる．また，形式的にも，述語性名詞と非述語性名詞を形態によって分類することは，直感に頼ることのない理解を促すという意味で学習者の助けとなるであろう．

なお，テノ名詞句の他にも，「時間があればの話」「お金欲しさの犯行」など，名詞句内に節や句を含んだ表現が存在する<sup>14</sup>．日常的に目にしながらもこれまで十分な研究がなされてこなかったこれらの現象を，今後さらに検討していく必要がある．

## 参考文献

- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，スリーエーネットワーク．
- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』，スリーエーネットワーク．
- 井口厚夫(1992)「「サラ金に追われての夜逃げ」型の連体構造」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究 11——計算機用レキシコンのために(3)——』，情報処理振興事業協会技術センター，99-111．
- 内間直仁(1996)「助詞[の]と簡略化表現」，中條 修(編)『論集言葉と教育』，和泉書院，75-95．

<sup>14</sup> テノ名詞句にも，「三食続けてのカレー(でうんざりした)」「ランナーを置いての松井(は警戒すべきだ)」のような，述語性名詞と非述語性名詞のいずれにも該当しない例が散見される．具体的な分析は今後の課題となるが，これらの例も，少なくとも(16)の一般化には反しないと思われる．

- 荻野綱男 (1996) 「言語データとしての話者の内省・新聞 CD-ROM・国語辞典の性質——サ変動詞の認定をめぐって——」『計量国語学』20-6, 計量国語学会, 233-252.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 許 恵晴 (2001) 「「連用節 + ノ」用法についての一考察」『銘傳日本語教育』4, 銘傳大学, 130-148.
- グループ・ジャマシィ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』, くろしお出版.
- 佐藤直人 (1996) 「「テ」で導かれる句の構造的な大きさと時称的解釈」『新潟大学国語国文学会誌』38, 新潟大学人文学部国語国文学会, 17-38.
- 佐野由紀子 (1997) 「程度副詞の名詞修飾について」『日本学報』16, 大阪大学文学部日本学研究室, 121-133.
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味——その1——」『日本語・日本文化』4, 大阪外国語大学留学生別科(寺村(1993), 157-207 に再録).
- 寺村秀夫 (1977) 「連体修飾のシンタクスと意味——その3——」『日本語・日本文化』6, 大阪外国語大学留学生別科(寺村(1993), 261-296 に再録).
- 寺村秀夫 (1993) 『寺村秀夫論文集 I——日本語文法編——』, くろしお出版.
- 西山佑司 (2003) 「名詞句の諸相」『朝倉日本語講座 5 文法 I』, 朝倉書店, 109-127.
- 仁田義雄 (1995) 「シテ形接続をめぐって」, 仁田義雄(編) 『複文の研究(上)』, くろしお出版, 87-126.
- 姫野昌子 (1983) 「動詞「て」形の連体修飾構造」『日本語学校論集』10, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校, 25-43.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』, 大修館書店.
- 渡邊文生 (1994) 「接続形式「～テ」の意味に関する一考察」『山形大学紀要(人文科学)』13-1, 山形大学, 392-402.
- Koizumi, Masatoshi (1993) Modal Phrase and Adjuncts. In Patricia M. Clancy (ed.) *Japanese/Korean Linguistics* 2, 409-428, CSLI, Stanford University.